

キヤールとアルメニア

金澤 忠信

ピエール・キヤール (Pierre Quillard, 1864-1912) は、19世紀末から20世紀初めにかけて活躍したフランスの詩人である。

48年足らずの彼の生涯を見渡してみると、閉じこもって詩作に耽る詩人というよりは、現場に行き観察し、行動する活動家としての側面が強い。実際、詩的作品の数・量ともに少なく、詩人としてはほぼ無名と言ってよいだろう。

彼の名はむしろアルメニア問題との関連で知られる。アルメニア問題は、19世紀末にオスマン・トルコ帝国で起こった虐殺事件以降、西ヨーロッパにも知られるようになった。現在、「アルメニア人虐殺」と言えば、1915年から1916年にかけて行われた虐殺のことを指すのが一般的だが、キヤールが関わったのは、1894年から1896年にかけて、オスマン・トルコ皇帝アブデュル＝ハミト二世 (Abdül Hamit II, 1842-1918) の治世に起こった虐殺事件である。いずれについても、現トルコ政府は公認も謝罪もしておらず、トルコのEU加盟にとって大きな障害になっているとみなされている。しかも19世紀末の一度目の大虐殺は、いまや歴史から忘れ去られていると言っても過言ではない。

キヤールが活動していた時代も、西ヨーロッパ諸国にとってアルメニアは東方の一地域でしかなく、アルメニア問題に積極的に介入する状況ではなかった。本論稿では、そうした時代状況の中で、キヤールがどのような仕方で虐殺事件のことをフランスはじめヨーロッパに知らせ、それによって何を伝えたかったのかを検証・考察する。日本では詩人としてもアルメニア支援活動家としてもほぼ無名のキヤールの経歴と人物像を紹介する必要があるため、解説は概略的にならざるを得ないことをあらかじめお断りしておく。

1. 詩人たちとの交わり

ピエール・キヤールは1864年7月14日にパリで生まれた。フォンタヌ高校（現コンドルセ高校）時代に、のちに詩人・文学者となるルネ・ギル（René Ghil, 1862-1925）、ステュアート・メリル（Stuart Merrill, 1863-1915）、ロドルフ・ダルザン（Rodolphe Darzens, 1865-1938）、アンドレ・フォンテナ（André Fontainas, 1865-1948）、ジョルジュ・ヴァノール（Georges Vanor [Van Ormelingen], 1865-1906）、エフライム・ミカエル（Ephraïm Mikhaël, 1866-1890）、トリスタン・ベルナル（Tristan Bernard, 1866-1947）らと知り合う。この高校時代の出会いはそれぞれにとって決定的であり、互いに影響し合い、その後生涯にわたってキヤールと活動をともにした者もいる。

高校卒業後キヤールは古文書学校（l'École des Chartes）と高等研究学院（l'École des Hautes Études）で学び、フェルディナン・ド・ソシュール（Ferdinand de Saussure, 1857-1913）の言語学の講義にも出席している。またこの時期、盟友となるアンドレ＝フェルディナン・エロール（André-Ferdinand Herold, 1865-1940）や、カミーユ・ルモニエ（Camille Lemonnier, 1844-1913）、エドモン・ピカール（Edmond Picard, 1836-1924）、ジョリス＝カルル・ユイスマンス（Joris-Karl Huysmans, 1848-1907）、オーギュスト・ヴィリエ・ド・リラダン（Auguste Villiers de l'Isle-Adam, 1838-1883）といった文人とも交流があった。ドレフュス事件でともに論陣を張ることになるベルナル・ラザール（Bernard Lazare, 1865-1903）も同じグループにいた。彼らとともに詩人ルコント・ド・リル（Leconte de Lisle, 1818-1894）のもとに足繁く通った。詩人ステファヌ・マラルメ（Stéphane Mallarmé, 1842-1898）主催の「火曜会」に出入りし始めたのもこの頃である。のちにマラルメの埋葬に際して、ポール・ヴァレリー（Paul Valéry, 1871-1945）に弔辞を述べるよう促したのはキヤールである。

1886年、キヤールは、エフライム・ミカエル、ロドルフ・ダルザン、モーリス・メーテルリンク（Maurice Maeterlinck, 1862-1949）、グレゴワール・ル・

ロワ (Grégoire Le Roy, 1862-1941), シヤルル・ヴァン・レルベルグ (Charles Van Lerberghe, 1861-1907) らとともに、文学雑誌 *La Pléiade* (『昴』) を創刊する。この雑誌は5号までしか発行されなかったが、ノーベル文学賞を取ることになるメーテルリンクの処女作 *Le Massacre des Innocents* (『幼児虐殺』) を掲載するなど、一定の文学史的な価値はあった。ここでキヤール自らも処女作 *La Fille aux mains coupées* (『両手を切られた少女』) を発表している (のちに小冊子として出版)⁽¹⁾。

他の詩的作品としては *La Gloire du Verbe* (『御言葉の栄光』)⁽²⁾, *La Lyre héroïque et dolente* (『英雄哀愁詩』)⁽³⁾ がある。文献学的な作品もあり、1888年に、ギリシアの詩人テオクリトス (Theokritos, 310 B.C.-250 ? B.C.) の作品にいくつかの異なる方言が混在していることを扱った論文を発表している⁽⁴⁾。またそれ以降も、アルメニア問題およびドレフェス事件に関与するのとはほぼ同時期に、いくつかの古典ラテン作品の翻訳も手がけている⁽⁵⁾。

2. アルメニアへ

ブーランジェ事件 (1886-1889) の頃から、キヤールはミカエル、ラザール、エロールらとともに、共和派の立場で、雑誌や新聞に、当時の政治問題に関する記事を投稿するようになる。

キヤールは1893年にコンスタンティノーブルへ赴く。当初はアルメニア人のための二つの中学校でフランス語とラテン語を教えるのが目的だった。その後、やはりアルメニア人が通うガラタ中央中学校で、生徒たちに請われるかた

(1) Pierre Quillard : *La Fille aux mains coupées*, Mercure de France, Paris, 1893.

(2) *La Gloire du Verbe*, Librairie de l'Art indépendant, Paris, 1890.

(3) *La Lyre héroïque et dolente*, Mercure de France, Paris, 1897.

(4) Pierre Quillard, Marcel Collière : *Étude phonétique et morphologique sur la langue de Théocrite dans les syracusaines*, Croville-Morant, Paris, 1888.

(5) *L'Antre des Nymphes*, de Porphyre, Librairie de l'Art indépendant, Paris, 1893 ; *Les Lettres rustiques*, de Claudius Ælianus, Prénestin, Mercure de France, Paris, 1895 ; Le livre de Jamblique sur *les Mystères*, Librairie de l'Art indépendant, Paris, 1895 ; *Philoktètes*, de Sophocle, Fasquelle, Paris, 1896 ; *Les Mimes*, d'Hérodas, Mercure de France, Paris, 1900.

ちで哲学と文学史を教えるようになる。ちなみのこの学校は学者、芸術家、作家、政治家などを多く輩出しており、後述する 1895 年のゼイトウン蜂起で重要な役割を果たす何人かの人物や、オスマン銀行襲撃事件（1896）の首謀者の一人もここで学んでいる⁽⁶⁾。

コンスタンティノーブルでは現地のリベラルな新聞の記者たちと交友を持つようになる。ジャーナリストで詩人のアルシャグ・チョバニアン（Archag Tchobanian, 1872-1954）もそのうちの一人だった。おそらく同じ詩人として意気投合したのであろう。チョバニアンは現地の雑誌で、キヤールの詩をアルメニア語訳し、解説付きで紹介している。二人の関係は、チョバニアンがフランスに亡命してからも、キヤールが亡くなるまで続くことになる。

1894 年、トルコ領内ビトリス州サスン地区で最初の大規模な虐殺が行われた際、キヤールは *La Revue de Paris*（『パリ評論』）に偽名で「サスーンの虐殺」と題した調査報告書を投稿している⁽⁷⁾。偽名を使ったのは職場であるアルメニア人学校に対する配慮からである。

キヤールは、アルメニア人ばかりと連れだっているのをオスマン・トルコ警察に目を付けられ、「煽動者」として逮捕されたことがあった。ただこのときは、列強の一国フランスから来ているということで、すぐに釈放された。それ以降キヤールは、フランス人であるという特権を最大限に活かし、現地での調査および支援活動を展開していく。「サスーンの虐殺」はその一つの成果と言える。

「サスーンの虐殺」の冒頭では、虐殺事件がヨーロッパに伝えられた経緯が簡潔に説明されている。

(6) オスマン銀行襲撃事件は 1896 年 8 月 26 日にコンスタンティノーブルで起こったテロ事件。アルメニア人 26 人がオスマン銀行に立て籠もり、アルメニア 6 州の改革などを要求する声明を発表した。ヨーロッパの公使代表の介入で事件は収束したが、その直後コンスタンティノーブルでトルコのムスリムたちが暴徒化し、数千人のアルメニア人が殺害された。

(7) Maurice Leveyre (Pierre Quillard) : «Les massacres des Sasounkh», *Revue de Paris*, tome 5°, 1895, pp. 73-91.

1894年11月にまずイギリスの報道機関に対して、8月と9月にサスンで起こった虐殺の概要が伝えられ、その後エルズルムのイギリス領事の報告を通じて事件の詳細が明らかになった。ただ、犠牲者の数については4,000人とも10,000人とも言われ、また虐殺の首謀者についても、遊牧クルド人、オスマン・トルコの非正規兵、あるいは正規軍など、情報が錯綜していた。ヨーロッパの報道機関にたいしてトルコ政府から激しい反論が寄せられたが、同時に、ロシアの検閲のもとティフリスで出版されたアルメニア語の雑誌は事件の詳細を事実として伝えた。一般に外国の事情には無関心のフランスの新聞も、小アジアでの残虐行為を厳しく非難した。

キヤールは「サスンの虐殺」執筆にあたって、虐殺事件およびオスマン・トルコ帝国領内外におけるアルメニア人たちの状況に関して証拠となる資料を参照することができ、また、虐殺を逃れた3人の証言者の供述書も入手したという。これらの資料をもとに作成された「サスンの虐殺」の目的は、「公正かつ正確な報告によって、これまで不十分にしか知られていなかった事実を、フランスに知らしめる」⁽⁸⁾ことである。実際、この報告書では、アルメニア人たちの生活環境や、クルド人による不当な租税の徴収、そしてサスンの虐殺事件の経緯が詳細に述べられている。特に人名・地名など固有名詞が多く用いられているのが特徴と言える。そして、現場にいて目撃した者でなければ分からないような情報がふんだんに盛り込まれ、虐殺の過程で女性が暴行されたり、子供も容赦なく殺されたりする様子や、牢獄での残虐な拷問のやり方などが事細かに描写されている。

キヤールは、アルメニア問題の調査を通じて、アルメニア人の運動の重要性と、アルメニアを含む東方問題がヨーロッパの平和をどのくらいまで脅かしているのかについて認識することができたという。キヤールにとって、アルメニア人虐殺事件はけっして対岸の火事などではなかった。この問題を放置し、抑圧され抹殺されようとしている者に支援の手が差し伸べられなくすれば、いず

(8) *Op. cit.*, p. 74.

れヨーロッパでも同じようなことが起こりうることをキヤールは察知し危惧していたのである。

キヤールは1896年にはいったんフランスに帰国するが、ほどなくして、挿絵入り新聞 *L'Illustration* の現地特派員として、主にアテネから、ギリシアを含めた東方問題に関する記事を書き送っている。⁽⁹⁾

1897年、キヤールはアガシ (Aghassi) というアルメニア人の著作『トルコ兵によるサルヴァトーレ神父の殺害』⁽¹⁰⁾ の出版に携わり、自身序文を書いている。

序文の冒頭でキヤールは、ベルリン条約(1878)に基づいてヨーロッパによってトルコ人、チェルケス人、クルド人から保護されるはずのアルメニア人が、ここ2年あまりの間にアナトリアおよびコンスタンティノーブルで130,000人虐殺されたと述べている。また、大使・領事ら現地の外交官たちはこの事件の情報を政府に伝えているはずなのに、そのことについて何ら公的な報告書を提示しようとしないうフランス外務省を批判している。

やはり序文でキヤールが指摘しているように、この書物は、数ヶ月にわたってオスマン・トルコの軍勢による攻撃をしのいだゼイトウン蜂起(1895)でアルメニア人側のリーダー的存在だったアガシなる人物が、母語のアルメニア語で書いた手記を、アルシャグ・チョバニアンがフランス語に翻訳したものである。「アガシ」も人物を特定されないための偽名と推測されるが、おそらくこの偽名の人物の証言が信憑性を損なわないようにするために、人名・地名などの固有名詞や日付は詳細に記載されている。また、キヤール自身が、事件のあと、当時25歳のアガシと直接会って話したことにも言及し、「若干かすれ声」

(9) *L'Illustration* : «Athènes en temps de crise», 13 mars 1897 ; «Sur la frontière d'Épire», 3 avril 1897 ; «Les événements d'Orient - La misère à Athènes», 17 avril 1897 ; «D'Athènes à Pharsale», 15 mai 1897 ; «La bataille de Vélestino - L'évacuation de Volo», 22 mai 1897 ; «La bataille de Domokho», 29 mai 1897.

(10) *L'Assassinat du Père Salvatore par les soldats Turcs*, témoignage d'Aghassi, un des quatre chefs de l'insurrection de Zeïtoun, traduit de l'arménien par Archag Tchobanien, avec une préface de Pierre Quillard, Mercure de France, Paris, 1897. [la Bibliothèque nationale de France, Notice n° : FRBNF 31702524]

「切れ長の目」, 「痩せこけた頬」, 「短い髭」などとアガシの人物像を描写している。

タイトルにも入っているサルヴァトーレ神父 (Salvatore Lili, 1853-1895) は、イタリア出身のフランシスコ会士で、1895年11月19日にムヂク＝デレ (Moudjik-Déré) という集落の修道院でオスマン・トルコの兵士によって殺害されたと記されている。

アガシの語るところによると、事件当日の日の出頃、1,000人のトルコ正規軍の兵士と数千人の民兵がムヂク＝デレに入ってくる。この時はまだ虐殺は始まっていなかった。まず、トルコ軍を指揮していたマザル長官 (Mazhar-bey) がフランシスコ会の修道院にやってくる。マザル長官に対して、サルヴァトーレ神父は、全財産と引き換えに命だけは助けてくれと申し出るが、マザル長官は「私はお前を殺すために来たのだ」と答える。マザル長官が兵士たちにサルヴァトーレ神父の殺害を命じると、兵士たちは銃剣で神父を刺し、死体を修道院から出して、ごみ溜めの中に投げ捨てた。そしてそれが合図となり、アルメニア人の村人に対する虐殺と、住宅および修道院の略奪・放火が始まった。トルコ軍は、ヨーロッパに対して、フランシスコ会士はアルメニア人たちによって殺害されたと思わせるため、アルメニア人の証言者が一人も残らないよう、3時間にわたって虐殺・略奪・放火を続けた。幸い、サルヴァトーレ神父の殺害を間近で目撃した一人の青年と一人の少年が難を逃れ、隣村のイエニヂェ＝カレ (Yénidjé-Kalé) にたどり着き、ムヂク＝デレでの悲劇を語った。

アガシがこの二人の目撃者から直接話を聞いたかどうかはここには記されていないが、いずれにせよ、アガシはサルヴァトーレ神父殺害の現場に居合わせ⁽¹¹⁾ていたわけではなく、目撃者の証言をもとに、自らの手記を書いている。また、

(11) 『トルコ兵によるサルヴァトーレ神父の殺害』のすぐあとに出版された同著者・同訳者による『ゼイトゥン——その起源から1895年の蜂起まで』では、マザル長官がフランシスコ会修道院にやってきたのは11月18日の月曜であり、この時サルヴァトーレ神父は傷を負っただけで、亡くなったのはあとのことだと述べられている。Aghassi: *Zeitoun - depuis les origines jusqu'à l'insurrection de 1895*, traduction d'Archag Tchobanian, préface par Victor Bérard, Mercure de France, Paris, 1897, p. 251.

アガシは抑圧・虐殺される側の立場にあるので、トルコ人は男だけでなく女や子供にも容赦せず、平気で約束を裏切り、劣勢時にはすぐに逃げ出す、というふうには、残忍かつ卑怯で臆病なトルコ人と、同胞のために最後まで勇敢に戦い、窮地にあってもヨーロッパ人の神父たちに救いの手を差し伸べる寛容なアルメニア人とを、きわめて対照的に描写している。

この書物は事件発生から一年あまり経って出版されているわけだが、その間、殺人の裁判は開かれないうままであり、ヨーロッパが介入してこないのに乗じて、アルメニア人に対する虐殺が断続的に行われていた。キヤールらは、それでも動こうとしないフランスはじめヨーロッパの各国政府の対応に業を煮やしており、どうしても新聞・雑誌・書物などを通じて世論に訴えかける必要があった。書物のタイトルを『アルメニア人のゼイトゥン蜂起』や『オスマン・トルコによるアルメニア人虐殺』などではなく、『トルコ兵によるサルヴァトーレ神父の殺害』にしたのは、おそらくそのためである。つまり、イタリア人のフランシスコ会士、ヨーロッパ人のキリスト教徒であるサルヴァトーレ神父は、たまたま虐殺の現場に居合わせ、たまたま命を落としてしまったわけではなく、トルコ人指揮官の明確な指示によって、まず最初に殺害され、それがきっかけとなってアルメニア人虐殺が開始された、ということである。そこには、フランスの世論、ひいてはヨーロッパの世論を、アルメニア問題に巻き込もうという明確な意図が読み取れる。この書物がフランス語で出版される意味と必然性もそこにある。

「サスーンの虐殺」ですでに触れたように、キヤールにとって、アルメニア問題、あるいはトルコ、ギリシア、ロシア、アルメニアなども含めたいわゆる東方問題は、たんに東方の遠い世界の話ではなかった。序文の末尾では、「おそらくごく近い将来、ヨーロッパ人たち自身の生命も脅かされかねない」と、今度は明確な文言をもって、警鐘を鳴らしている。実際、歴史的事実として、第一次大戦ではヨーロッパも戦場となり、アルメニア人に対して再び大規模な虐殺が行われ、第二次大戦中にはヨーロッパでユダヤ人虐殺が行われることになるが、キヤールは1912年に亡くなっており、自分の予言が現実のものとな

るのを見ることはなかった。

3. 人権同盟

ドレフュス事件（1894-1906）のさなか結成された人権同盟（La Ligue des Droits de l'Homme）の創設メンバーにキヤールも含まれていた。1904年には同盟中央委員会の委員に選出され、1907年には副総裁、1911年には事務局長に就任している。

キヤールはフランシス・ド・プレサンセ（Francis de Pressensé, 1853-1914）はじめ人権同盟のメンバーたちとともに、ドレフュス擁護の陣営で様々な活動に従事した。リベラルな各新聞に投稿し、一連のゾラ裁判（1898）では証言台に立ってゾラを擁護した。ドレフュス支援を求めてプレサンセとともにフランス中を駆け回った。多い時には年間80ヶ所で講演会や集会を催した。何度か暴漢に襲われ、命の危険に曝されたこともある。また、反ドレフュス・反ユダヤ主義を標榜する新聞 *La Libre Parole* が、自殺したアンリ中佐の夫人のために1898年12月から約一ヶ月間募金および署名活動を行った際、「恥辱の記念碑、不名誉の目録」として、署名者のリストを、添えられたコメントとともに公表している。⁽¹²⁾

1902年には、アルメニア問題だけでなく広く東方問題を扱った週刊総合誌 *Pro Armenia*（『アルメニアのために』）を創刊し、編集長を務めている。編集委員には、ジョルジュ・クレマンソー（Georges Clemenceau, 1841-1929）、アナトール・フランス（Anatole France, 1844-1924）、ジャン・ジョレス（Jean Jaurès, 1859-1914）、フランシス・ド・プレサンセ、ジャン・ロンゲ（Jean Longuet, 1876-1938）らが名を連ねていた。ちなみにロンゲはフランスの社会主義者・政治家で、カール・マルクス（Karl Marx, 1818-1883）の孫にあたる。

(12) Pierre Quillard: *Le monument Henry: listes des souscripteurs classés méthodiquement et selon l'ordre alphabétique*, P.-V. Stock, Paris, 1899. ちなみにこのときポール・ヴァレリーは、「熟慮なしにではなく」、3フラン募金した。

Pro Armenia は青年トルコ人革命（1908）の直後まで発行を続けた。

アルメニア問題に関するそれまでのキヤールの一連の調査は、1902年の「*Pour l'Arménie*」（「アルメニアのために」）⁽¹³⁾にまとめられる。そこではまず、露土戦争（1877-1878）を受けて1878年3月3日に締結されたサン・ステファノ条約の第16条を引用して、アルメニア人の居住する諸州で要求されている改革をトルコ政府がただちに実行し、クルド人およびチェルケス人からアルメニア人を保護しなければならないということが確認される。そして、コンスタンティノーブル総主教ネルセス・ヴァルジャベディアン（Nersès Varjabédian, 1837-1884）がベルリン会議（1878）開催中、列強各国代表に宛ててアルメニア人の惨状に関する報告書を送り、独立国家の樹立ではなく、自律したキリスト教組織を保障するよう要請したことが触れられている。さらに、『トルコ兵によるサルヴァトーレ神父の殺害』の序文をはじめ、いたるところで引き合いに出されているように、1878年7月13日に調印されたベルリン条約の第61条では、サン・ステファノ条約を引き継ぎ、「オスマン・トルコ政府は、アルメニア人の居住する諸州で要求される改善と改革の即時実行ならびにチェルケス人とクルド人に対するアルメニア人の安全保障に従事する。同政府はその履行にあたって講じた方策に関して、その適用を監督する列強に対し、定期的に報告しなければならない」と決められていることがここでも強調されている。

だが改革は実行に移されず、1893年から1896年にかけて300,000人のアルメニア人が虐殺され、20世紀に入っても事態は改善されていない。ここでのキヤールの意図はやはり、アルメニア問題をオスマン・トルコ帝国領内部だけに限定せず、ヨーロッパ列強を巻き込んで、アルメニア人の状況改善とアルメニア諸州の改革の実行をオスマン・トルコ政府に迫ることである。そのためには、どうしてもフランスの読者にアルメニア人の現状について周知し、世論を動かす必要があった。

「アルメニアのために」は大きく二部に分かれる。第1部は6章で構成され、

(13) Pierre Quillard: «Pour l'Arménie», *Cahiers de la Quinzaine*, 19^e cahier de la 3^e série, Paris, 1902.

第1章「通行の禁止」、第2章「税の徴収」、第3章「警察と監獄」、第4章「アルメニア人居住地への（トルコ人）移住者の定着」、第5章「乱暴な排斥、暗殺と略奪、クルド人官吏とオスマン官庁の共謀」、第6章「虐殺そのもの、ゼイトウンとサスーン」となっており、いずれも公式な資料や証言などから、アルメニア人の置かれた過酷な現状を詳細に報告している。第2部では、アルメニア人に関する根も葉もない偏見・先入観を払拭する試みがなされる。たとえば、オスマン帝国のどの地域にもそれほど多くのアルメニア人はいない、アルメニア人の革命運動はロシアとイギリスに買収されている、アルメニア人のための介入はヨーロッパの戦争を招く、などの偏見・通説があり、アルメニア問題にヨーロッパが積極的に介入するのを阻害する要因となっていた。キヤールは数値データ、職業リスト、外交文書などの資料を駆使しながら、それらの偏見を一つ一つ反駁している。

結論として、アルメニア問題には三つの解決策しかない。一つ目はアルメニア民族の絶滅、二つ目はアルメニア諸州をロシアに併合する、三つ目は政治的・行政的の改革である。二つ目の解決策は、ロシアにとっては好都合だが、ロシアの南下政策を阻止したいヨーロッパ列強にとっては受け入れがたい。アルメニア人にとっても、自らの言語と国民性（*nationalité*）を失うのは幸福ではない（アルメニアの格言「トルコは木の枝を切り、ロシアは根を切る」が紹介されている）。最終的に選択肢は最後の三つ目しかないが、オスマン・トルコに改革を実行させ、アルメニア民族を絶滅から救うためには、必ずしもヨーロッパ列強全体が一致団結する必要はなく、いくつかの国の間でなんらかの合意があれば事足りるとキヤールは述べている。キヤールの提示する解決策は結局列強の介入頼みなのだが、一民族を絶滅から救い、民族としてのアイデンティティを保障するためには、当時として考えうる限り現実的で、最低限実現可能な提案だったと言える。

1905年、キヤールはフランシス・ド・ブレサンセ、アンドレ＝フェルディナン・エロール、ピエール・ラ・シェネ（Pierre La Chesnais, 1865-1948）、ル

イ・デュミユール (Louis Dumur, 1860-1933) らとともに、*L'Européen* の創刊に携わる。ここではロシア帝国によるフィンランドの自治権廃止に関する問題などを扱っていた。

詩人とアルメニア支援活動家の両方にまたがる仕事として、キヤールはアルシャグ・チョバニアンが自らアルメニア語からフランス語に訳した詩集の出版に携わり、その序文を書いている⁽¹⁴⁾。

チョバニアンは、コンスタンティノーブルでも激しさを増したアルメニア人に対する迫害を逃れてパリに亡命していた。この詩集には、1894年以前にコンスタンティノーブルで書かれた詩と、その後パリで書かれた詩が収められており、虐殺や亡命生活を扱ったものも含まれている。

キヤールによる序文では、1894年以降300,000人のアルメニア人が虐殺され、それ以降も破壊と絶滅へ向けた行動が着々と進んでいることが指摘されている。それによって示唆されるのは、これはたんなる詩集ではなく、アルメニア人虐殺の事実を、詩のかたちで、フランス語で、フランス人はじめヨーロッパの人々に知らしめる役割を担った詩集の出版である、ということである。また、チョバニアンが古典アルメニア語の語彙だけでなく、むしろ今日話される生きた言葉を多く用いていることにも触れている。ここにも、アルメニア人の言語と民族としてのアイデンティティを保障し、一民族の絶滅およびその文化の消失を食い止めようとするキヤールの一貫した姿勢が見て取れる。

1896年のオスマン銀行襲撃事件は、アナトリアでのアルメニア人虐殺よりもはるかに大きな衝撃をもって即座にヨーロッパに伝えられた。それは、イギリスとフランスの出資によって設立された近東最大の銀行を占拠するテロ事件だったからである。キヤールは、テロとは違うかたちで、現場で調査をし、書物や新聞記事を公表することを通じて、抑圧され抹殺される声なき者に声を与

(14) Archag Tchobanian : *Poèmes*, préface de Pierre Quillard, Mercure de France, Paris, 1908.

えようとした。そうしたアルメニア人支援活動はたんに情緒的あるいは宗教的な理由からしているわけではなかった。トルコで起こったことはヨーロッパでも起こりうることであり、そうした事態に陥らないためには、たとえ遠く離れ、一見関係なさそうな相手とでも、連帯関係を築いておく必要がある。沈黙や無関心こそが次の虐殺を生むということを、キヤールは我々に伝えているように思われる。

キヤールは人権同盟事務局長に就任してからわずか数ヶ月後、1912年2月4日に突然この世を去った。彼の告別式に参列し弔辞を述べた者が口を揃えて言うように、彼はアルメニア問題でもドレフュス事件でも危険を顧みず、率先して難局に身を投じたが、けっして表舞台に出て手柄を誇示するタイプではなかった。今後、救済活動に従事したこの無名のフランス人活動家・詩人に光を当て、歴史に埋もれたアルメニア人虐殺を再考する意義は十分にあるだろう。キヤールの警鐘にもかかわらず、虐殺は繰り返され、そのために一世紀を経た今でもトルコとアルメニアは国交正常化には至っていない。第三者による救済の理念および介入の方法が適切であったかどうかも含め、1894年から1896年のアルメニア人虐殺と事後処理に関してさらに検証する必要がある。

参 考 文 献

À la Mémoire de Pierre Quillard, Mercure de France, Paris, 1912.

Alem, Jean-Pierre: *L'Arménie*, «Que sais-je?», No. 851, PUF, Paris, 1959. [アLEM, 『アルメニア』, 藤野幸雄訳, 白水社, 1986。]

Benveniste, Émile: «Ferdinand de Saussure à l'École des Hautes Études», Extrait de *l'Annuaire 1964-1965*, École Pratique des Hautes Études, IV^e section, sciences historiques et philologiques, Paris, 1964-1965.

Birnbaum, Pierre: *Le moment antisémite: un tour de la France en 1898*, Fayard, Paris, 1998.

Blum, Léon: *Souvenirs sur l'affaire*, Gallimard, Paris, 1935. [ブルム, 『ドレフュス事件の思い出』, 稲葉三千男訳, 創風社, 1998。]

Boussel, Patrice: *L'affaire Dreyfus et la presse*, Armand Colin, Paris, 1960.

藤野幸雄: 『悲劇のアルメニア』, 新潮選書, 1991。

Miquel, Pierre: *L'affaire Dreyfus*, «Que sais-je?» No. 867, PUF, Paris, 1959. [ミケル, 『ドレ

ーフェス事件』, 渡辺一民訳, 白水社, 1990。]

中島偉晴: 『アルメニア人ジェノサイド —— 民族 4000 年の歴史と文化』, 明石書店, 2007。

Nalbandian, Louise: *The Armenian Revolutionary Movement*, University of California Press, Berkeley and Los Angeles, 1967.

Pasdermajian, H.: *Histoire de l'Arménie*, Librairie orientale H. Samuelian, Paris, 1949.

Winock, Michel: *Le siècle des intellectuels*, Seuil, Paris, 1997-1999. [ヴィノック, 『知識人の時代』, 塚原史・立花英裕・築山和也・久保昭博訳, 紀伊國屋書店, 2007。]